[書評] 中才敏郎(著)『心と知識』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9787

中才敏郎著
『心と知識』(勁草書房，1995年刊)
── 著者の自然主義はどこへ行き着くか ──

本書は，意味論や行為論や認知科学と連携しながら展開されつつある現在の心の哲学の諸問題を，極めて丁寧な文献読解を踏まえながら解説し，また同時に著者の立場からそれらの解決の方向を呈示しようとしたものである．本書の目配りの良さとさまざまな議論に対する評価の公平さは，評者の見る限り現在の心の哲学を概観するのに最適である．しかし同時にこの長所は，著者の立場をできるだけ鮮明に打ち出すという戦闘性をいささか犠牲にしてしまったのではなかろうか（何にでも咬みつけばいいというものでもないとは思うが）．本書に対する評者の不満を強いて挙げれば，その一点に尽きる．

しかし著者の立場がはっきりしていないというのではない．それどころかそれは極めてはっきりしている．「心を自然の一部として客観的に理解しようとする自然主義ないし広義の物理主義」(p. 4) がそれである．しかしこの自然主義はいわゆる還元的な自然主義ではなく，もう少し穏やかな非還元的な自然主義である．しかしではその非還元的な自然主義は，心の哲学においてどんな問題を抱え込み，それにどんな解決を与え，どんな直観を放棄するようにわれわれに迫るのだろうか．この著作の真価は，

この立場に本質的につきまとう曖昧さなしにいかに一貫した冷静な姿勢でこのことを論じぬくか，ということに求められるだろう．とくにそれは，その自然主義の代償に支払うべきものの点で人を誤解に導くような「論理のゆるみ」があってはならない．というのも，物心二元論も物一元論も共になおそれなりの「正しさ」を保持している限り，非還元的自然主義（物理主義）は，ややもすればそれらの「正しさ」に都合よく寄りかかるだけの妥協の産物になりかねないからである．実際，デイヴィドソンに代表されるようなタイプの非還元的自然主義の「口当たりの良さ」が「論理のゆるみ」から出てきているにすぎないのではないか，という批判はいまや周知のものである．つまり著者の立場は，野蛮だが頑健な還元的物理主義と洗練されてはいるが科学的に貧弱な二元論とに常に挟撃される運命にあり，それゆえいかに洗練された頑健な自然主義たりうるか，ということがその一番の課題となるのである．

その課題に著者がもっとも積極的に答えようとしているのは，4部構成にわたる全体のうち，第3部「志向性と意識」および第4部「自己知識」においてである（ちなみに第1部「他者の心」，第2部「行為とはなにか」）．評者には，これらの主題領域での著者の微妙な対処を詳しく吟味するだけのスペースが与えられていないので，著者の基本戦略を大ざっぱに指摘するだけで満足しなければならない．それは，「半ば人工的で半ば自然的な存在物」（p. 233）といった特徴を現にわれわれが所有している心・行為・意識・人物といった概念の中に辿ること，これである．例えば行為について著者は，それは因果的特性によって一つの出来事として同定されるが意味特性によって個別化されると主張し（p. 112），また信念についても，それは一枚岩的なものではなく因果的な特性と意味論的な特性を「人工物のアマルガム」のように持つと主張する（p. 168）．この戦略は基本的に，トークン同一性とタイプ還元不可能性を主張する多重実現性テーゼのヴァリアントであり，その限りで確かにわれわれの日常的直観には心地よいが，このままでは還元的物理主義者もデカルト的二元論者も満足しないであろう．例えば著者は，消去主義の批判の鉾先を「科学理論としての常識心理学」と「常識的機能主義」へと誘導することによって，消去主義に抗して，「技能としての常識心理学」と「科学的機能主義」を救おうとするが，われわれがなぜ人工的（フィクショナル）な要素を抱える後者の常識心理学を将来も手放そうとしないのか，ということの説明を説得的になしえているようには思われない．常識心理学の存在論的含意（信念や欲求）に対する著者の一見してアンビヴァレントな評価も，非還元的自然主義を一貫させることの困難さを示しているように思われる．というのも，自然主義の立場からすれば，概念のフィクショナルな要素とはまさしく実在に対応しないという意味で「虚妄な」要素に他ならないが，しかしそれを非還元主義の立場からなんらかの仕方

で擁護しなければならないからである．このためには因果的説明や性質の存在論などに関して，反直観的な議論（哲学者にとって？）を受け入れる必要が出てくるのかもしれない．あるいはそれとも著者は，このような困難の最終的な解決は，「いかなるフィクションに従ってわれわれは生きるべきか」というすぐれて倫理的な問いの解決と共に初めて可能となると考えているのだろうか．いずれにせよ著者の自然主義は，これから次の港へと船出をするように思われる．

なお，この書評に先だって評者は，「京都科学哲学コロキアム」例会における本書の合評会で代表質問をする機会を与えられた．当日評者の質問に快く答えて頂いた著者，ならびに出席者の皆さまにこの場を借りて感謝の意を表したい．

（柴田正良）